

害虫発生概況

1～2月は九州全般にわたって著しく低温で記録的な寒冬であつたが、春季～初夏が各地とも高温に経過したため、ニカメイチュウ越冬幼虫の発育には好適となり、第1回成虫の発生は、典型的な早発・多発型となつた。先年来の傾向として見られるように、本年も多峰型の誘殺曲線を示したところが多いが、7月に入つてからの後期発蛾が非常に少なかつた。そのため、中・南部九州で早期水稻に若干の被害を見たほかは、防除効果とあいまつて第1世代幼虫による被害は少なかつた。続く第2世代も、成虫の少発と徹底した防除のため、全般的に被害は非常に少なくてすんだ。従つて越冬幼虫の密度も各地とも低かつた。これにたいして、南九州におけるサンカメイチュウの発生はかなり顕著で、宮崎県下の沿海部一帯に第2世代から第3世代にわたつて多発し、被害をもたらしたほか、鹿児島南部にも広く発生をみ、分布の拡大が確認された。

セジロウンカ・トビイロウンカの発生には寒冬と5～6月の多雨が悪条件となり、水田への初期飛来虫は両種ともにきわめて少なく、続く夏季の多雨、秋季の低温と気象条件が好適でなかつたためか、その後の増殖も少なく、山間部常発地の一部を除きほとんど被害を認めなかつた。一方ヒメトビウンカ・ツマグロヨコバイの両種は初期飛来侵入成虫の出現は早く、発生量も多かつた。そのため特に中・南部九州では縞葉枯病・萎縮病が多発したところが多く、黄萎病も昨年ほどではなかつたものの広く発生をみ、宮崎、佐賀両県の一部では引き続きクロスジイシク病のまんえんが認められるなど、ウイルス病による被害は依然として全くおとろえを見せていない。なおツマグロヨコバイは夏期の水田での増殖も著しく、各地で異常多発生の傾向が認められたが、目立つた実害を出すまでには至らなかつた。

夏期には全般にフタオビコヤガの発生が多く、激発したところもあつたが、多くはメイチュウ防除によつて併殺されたため軽微な被害にとどまつた。また昨年、一昨年に続いてイネヨトウ・アヲヨトウも各地で点発したが、秋季の増殖がおさえられたため、本年は被害が少なかつた。

カメムシ類では宮崎県下ではミナミアオカメムシが引き続き多発し、特に早期・普通期混作地帯で被害をもたらした。熊本県の一部でも晩稲が被害を受けたほ

か、クロカメムシがやはり南九州を中心に山間・山ろく地帯でかなり発生、一部に被害をもたらした。

また佐賀・長崎・熊本各県下ではキリウジが多発し、苗代、早期水稻に例年にない大害を受けたところもあつた。そのほか山間、山ろく地帯を中心としてイネゾウムシ、ヒメクサキリ、ヒメジャノメ、タテハマキ、カラバエ等の発生が随所に見られたが、被害はごく局地的で問題となるには至らなかつた。

畑作物の害虫ではここ数年来ヨトウ類の多発が注目されているが、本年もハスモンヨトウが九州全域にわたつて大発生し、甘藷・サトイモ・大豆・蔬菜類・飼料作物等種々の作物に加害し、特に甘藷は中・南部九州を中心としてナカジロシタバ、イモコガ、イモヒナガの多発とあいまつて、再三の防除にもかかわらず相当の被害をこうむつた。その他各種十字科野菜にはヨトウガ、キスジノミハムシ、コナガの加害が目立つたところもあつた。

麦の害虫ではハモグリバエの多発が長崎・熊本両県下で報告されたほか、晩秋にトビムシモドキによる種子の食害が局地的に認められた。

果樹の虫害は比較的にな少なかつたが、初夏の長雨で防除が不徹底となつたため福岡県下ではカキノヘタムシが著しく多発して柿に被害を与え、またブドウにはフタテンヒメヨコバイの局所的多発が報告された。中南部九州では柑橘類にたいするヤノネカイガラムシの加害が昨年よりやや多かつた。

病害発生概況

冬季から早春にかけての低温のため麦類サビ病・ウドンコ病の発生は平年よりおそく、その後の連続降雨でサビ病のまんえんも妨げられ少発生であつたが、ウドンコ病は後期の多湿によつてやや多くなつた地域もある。5月から6月にかけての多雨と高目の気温は、生育のややおくれていた麦の出穂期から後のアカカビ病の感染まん延に好適な条件となり、全県にわたり裸麦・小麦とも激甚な発生を来し、とくに北部九州では湿害をとまつて惨害を呈した。

5月以降の多雨、高温はまた各地とも菜種のキンカク病の感染時期に当たり、後のまん延も著しく、近年にない大減収の原因となつた。そのほか、春作馬鈴薯・トマトのエキ病、玉葱のベト病、瓜類の病害も多く発生した。

同様にこのころの多雨、日照不良、高温は早期稲の

葉イモチ、普通稲の苗代～本田前期の葉イモチの発生時期を早め、連続降雨による防除効果の低下も加わつて、近年にない多発生となり、平坦部では盛夏型の気象になると共に停滞したが、山間部では葉イモチの終えんはおくれた。また、6月末～7月上旬の集中豪雨は中北部九州でとくに著しく、普通稲苗代～本田初期のシラハガレ病の感染の機会を与え、8月中旬の豪雨、南九州の台風など後期発生促進の要因もかなりあつたが、初発生がやや早く発生面積も大きかつた割には、後期の進展が緩慢であつてツボ状発生が多く、発生程度はそれほど高くなかつた。これは出穂後の晴天と低温が蔓延を抑制したと考えられる。早期稲では宮崎でやや少なく、鹿児島は多目であつた。

穂イモチは早期稲では葉イモチの発生が出穂期まで続き、雨天で防除効果が充分でなかつた点もあつてとくに枝梗イモチがひどかつたが、後期の天気回復により一般に程度は激しくなかつた。普通作でも早植えや山間部で平年より多目であつたが、平坦部では出穂後の天候が良く、防除も広く行なわれたので程度は進行しないで終わった。中部以北では発生面積の大きかつた原因に品種が問題とされている。モンガレ病は中南部の早期稲で後期にやや進展して多目のところがあつたが、普通稲では初期生育のおくれと進展期の高温期間が短かつたためか全般に少発生であつた。

稲のウイルス病のうち、イシュク病は早期稲では少な目で、普通稲でも北九州では少なく、中南部でやや多かつた。シマハガレ病は早期稲では全般に多く、普通稲ではイシュク病と同じく中南部に多いが、北部では後期感染による被害が目だつた。オウイ病は早期稲では中北部で多くなり、従来多発した南九州では広範囲の防除と相まって平年並みとなつた。普通作では宮崎以外は多目の発生で、とくに後期感染と熊本の晩期稲の被害が多かつた。

その他、6月末～7月上旬の集中豪雨による浸冠水でオウカイシュク病が局地的に多発した。

水 稲 (普通期栽培)

初期分けつのは発生はやおくれたがその後の天候回復により生育は急激にばね回に向かつた。しかし分けつ後期の日照不足で茎数はやや少なく、穂数も減少し、1穂粒数もまた平年より少なめで、前半の作柄は全般に並みからやや不良と思われた。しかし前年同様出穂期以降は平穏で、台風の影響もほとんどなく、気

温はむしろ低めで較差が大きく、日照も多目であつたので、登熟の進度はややおそかつたが後期まで順調に進み、秋まさりの良好な登熟をとげたため、収量は福岡・佐賀・長崎三県では前年を更に上廻る史上最豊年となり、その他の県でもおおむね前年並みの豊作となつた。このように本年の豊作要因には第一に登熟期間の気象があげられるが、技術面で品種とこれに応ずる密植栽培法の普及徹底が大いにこうけんしているし、施肥技術の向上も見逃すことの出来ない要因であつた。

麦 類

初期生育は順調に進んだが、1月以降急激に冷え込んで降雪が多く、このため暖地では稀な雪害が局部的にあらわれ、以後の生育は平年より10日から20日もおくれた。しかし茎数はおおむね平年並みとなつたが、無効茎が多くて穂数はやや少なかつた。

生育のおくれで穂の形成もおくれ、出穂期も平年より5～10日のおくれとなつた。ところが出穂期前後から5月一ばいにわたる記録的な長雨で、赤カビ病の異常発生と加えて、湿害的な粘れうれ状態となり、登熟日数が平年より1週間近く短縮したが、長雨で収納も出来ず、収穫を放棄した農家も現われ、立毛のまま焼きすてる光景がみられ、くず麦がほとんどで、品質もきわめて悪くなり、世紀の大凶作となつた。

陸 稲

早期陸稲では初期高温少照で徒長軟弱となり、成熟期には降雨も少なく干害もみられた。初期の高温のため生育が促進された関係から、出穂成熟期は平年にくらべ10日以上早かつた。熊本では8月9日の台風で倒伏するものが多く収量は平年並みになつた。

普通期作は6月中旬の播種期が高温適湿で発芽はよく8月下旬の穂ばらみ——出穂期は少照多雨のため、例年の干ばつ害をまめかれ多収となつた。

甘 藷

育苗期間中の気象は、平年にくらべ気温高く、降水量多く、日照時間は少なかつたが、各地とも萌芽並びに伸長は順調であつた。植え付けはまれに見る長雨のため、麦、なたねの収穫作業がおくれたので、やや晩植となつた所が多かつたが、活着は良好であつた。長雨はその後も続いたので、初期生育は良好でなく、そ

の後7～8月にかけてもしばしば豪雨を伴つた長雨でつるはやや徒長気味であつた。しかし9月に入つてから気温はやや低くかつたが、降水量少なく、日照時間がとくに多かつたので、塊根の肥大は著しく促進された。その後もこのような好気象条件が持続し、台風害はなく、初霜も遅かつたので、各地とも収量は平年作を上廻る程度となり、澱粉歩留りもかなり高かつた。

馬 鈴 薯

春 作

冬季の異常的な低温により、種いもの休眠あけが遅れたため、春作の萌芽は平年にくらべ5～6日おくれた。さらにいもの形成肥大の時期に少照、多雨条件であつたため、その生育はおくれ、いも収量および澱粉価は、ともにきわめて低かつた。

秋 作

萌芽および初期生育は順調であつた。気温はやや低く、降水量は少なく日照時間が多かつたため、平年にくらべ塊茎の着生肥大は早かつた。しかし、地上部の生育はやや劣りいも収量も低かつたが澱粉価は平年よりも高かつた。

大 豆

生育の前半は高温に経過し後半はやや低温に経過した。熊本・大分以北では4月下旬から6月中旬までの長雨で少照のため生育は軟弱で徒長の傾向を示し、登熟期はやや干ばつ気味で熟期は1週間位短縮され、熊本では平年作だつたがその他の北九州では収量は平年を下まわつた。南九州では長雨の害は北九州ほどでなく平年作であつた。

秋大豆は開花期ころ、低温日照不足徒長気味で落花多く登熟期に低温乾燥のため充実わるく少収であつた。

な た ね (37年度播)

年内はおおむね平年並みの生育をしたが、1月上旬～2月下旬まで異常な低温となり、しばしば九州全域で積雪をみた。そのため全般的に生育は著しく阻害され、抽苔期は15～20日開花期は7～10日おくれた。その後5月上旬～6月下旬の長雨により九州全域に苗核病の異常激発と穂発芽、脱粒などにより収量は例年にくらべ20～30%となり、収穫皆無の地方も多かつた。

飼料作物・家畜

昭和38年の気象は前年とよくにており、冬季は低温でかなり降雪量があり、地上に積つた期間があつた。そのため雪どけには菌核病が多発し、アルファルファなどのマメ科作物は被害を受けた。その後4月中旬より7月中旬までの長雨によつて、牧草の刈りおくれ、利用不十分などによつて徒長、倒伏したが、その後の急激な高温、乾燥により葉ぐされ病の発生が多かつた。また、前年と同様に実取り用飼料作物、あるいは牧草採取ほとんど出来なかつた。

家畜関係では、昭和37年には、天候とは余り関係しないが、多頭化や外国種の輸入に伴つた新しい病気の発生が報告された。また、豚は前年の増産の影響を引きつづき年度前半まで受けて、価格の低落を見た。昭和38年度には、春の長雨によつて生じたアカカビ病被害麦の家畜への給与が問題になり、一部の家畜には、若干の被害が見られた。また長雨は、飼料作物の栄養収量に悪影響を及ぼし、粗飼料に依存する家畜の栄養が低下した。殊に放牧された家畜では、地盤の軟弱、水たまりの発生等も関係して草の利用度も低下し、栄養の低下の度は強かつた。豚は前年度の低価格が影響して生産不足となり、価格が著しく高くなつた。

果 樹

1月から2月にかけていわゆる極東寒波と称する大寒波の来襲あり、ミカン類の大寒害を生んだ。すなわち落葉甚しく、樹勢を損じ、開花したものの実止りが悪かつた。しかし夏以後の好天候に恵まれ、玉のびが意外によく、結局秋には平年作をやや上廻る収量を得るまでになつた。しかし新植園ではこの寒害のため枯死するものが続出し、再起不能におちいつたものが沢山あつた。特に共同育苗中のものが全滅した例が起こつた。また、ミカン苗の接木時期の長雨は接木適期をのがし、しかもその後疫病の大発生により、良苗率が大いに低下した。

次に4月中旬より6・7月に及ぶ長雨により、すべての果樹に大被害があつた。中でもブドウは開花中の雨のため受粉悪く、また房型が小さく近年まれにみる大減収となつた。カキも長雨と日照不良により、生理的落果多く、収量が少なかつた。しかも長雨のため各種果樹の病気が激発した。クリも花着きはよかつたが、長雨による日照不良により大減収であつた。

そ 菜

暖冬に暮れた37年は、年が明けて38年に入るや一転し、低温と長期降雪の気象となり、3月だけがやや平穩に過ぎただけで、カンラン、ホウレンソウ、イチゴ、トンネルニンジンその他越冬野菜は程度こそ軽重はあつたが、いずれ寒害を受けて減収した。

ハウス促成果菜も育苗当時から引き続き低温少日照で、降雪によるハウスの倒壊、ボトリチス、菌核病の多発、イチゴとボトリチス、奇形果の発生、草勢不良などにより著しく減収した。

さらに晩春5月からのはげしい長期梅雨のため、トンネル早熟の各種野菜、野菜採種も大不作に終わったが、南九州ではむしろ乾燥被害が現われた。

春夏作野菜はかくて市価の高騰を招いたが、秋冬作野菜はきわめて恵まれた気象環境と、作付け増による大豊作と暖冬による需要減などの条件が重なり、流通の混乱を起こして政治問題にまで発展し、その暴落と混乱のまま39年に引きつがれた。

花 き

冬季の降雪によつて倒伏したハウスが少なくなかつた。また1～2月の低温で促成球根の開花が遅れ3月に出荷が集中した。キンセンカ・ヤグルマソウなどの露地切花、ハウス内の抑制ギク、キンギョソウ、ストック等にも寒害をうけ、無暖房カーネーションは切花数が著しく減少した。

初夏の多雨のため球根アイリスに収穫直前からフザリウムが多発した。

盛夏高温のため抑制秋ギクの挿芽の活着不良であつた。花木苗の生育も一部干害をうけた。

中秋の低温のため抑制ギクの花芽分化発達が早く、品種によつては早期に開花した。

茶

(1) 一番茶

1月以降の気象は昭和11年以来の異常気象といわれ、茶産地の各地も積雪、低温により被害をうけた上に、3月下旬から4月上旬の晩霜害により相当の減収を予想されたが、4～5月にはいつてからの気象の好転により樹勢は回復した。しかし摘採期における長雨で開始期は7～10日おくれた。

(2) 二番茶

二番茶発芽後の伸育状況は気温の上昇と降雨にめぐまれ、順調に進み、摘採期は早くなつたが、出開きもまた早かつた。

(3) 三番茶

気温は平年並みに経過したが、降水量が少なく乾燥がちであつた。しかし茶芽の伸育は順調で摘採期は前年より早くなつた。

(4) 総括

全国的に寒波の影響によつて樹勢が弱められ、一番茶の減収は避けられないものと予想されていたが、37年産茶の不足気味から生産意欲を刺激し、さらに二・三番茶期においても価格が堅調に推移したため一段と生産が進み、全国累計では4.7%の増収であつた。

しかし、九州地方は熊本・大分・宮崎の各県が減収したため、全体的には前年とほぼ同様の生産量であつた。品質は本年当初の異常天候と一番茶期の降雨がわざわいして、上級品の生産は少なかつたが、価格は前年に比し10%程度の高値を示した。